

相沢 育哉 (Aizawa Ikuya)

2021～2022 年度奨学生

オックスフォード大学 教育学部 博士課程

1) 博士課程を経てジェネラリストになる。

博士課程を開始した当時、博士号は研究を一人前にするための免許証で、研究者の専門性を証明するライセンスのようなものだと思っていました。特にアメリカのようにコースワークが課されることはなく、自分のプロジェクトに邁進する英国の博士課程では、その傾向が特に強いと思っていました。私の場合には、English Medium Instruction (EMI: 英語を媒介として学問をする教授方法) を専門にしてきたので、「EMI」の専門家になることを目指して、博士の研究に取り組んできました。ただ、実際に、就職活動を開始すると、「EMI」の専門性を売るよりもより広い学問分野である「応用言語学」の知識や経験を前面に押し出す必要があることにすぐに気づきました。若手研究者として大学に採用してもらうためには、自分の専門性を貫くよりも、大学が求める研究分野に自分の研究を少しでも近づけることが重要だと身を以て実感しました。もちろん、教授や准教授レベルになると話も変わり、大学もその教員の専門分野に応じて授業を設けてくれます。ただ、エントリーレベルの若手教員は、学問領域内で、ありとあらゆる分野の授業を担当することになります。現在、私は英国の中部に位置する大学の言語学部で学部と修士課程の学生を対象に応用言語学(特に心理教育学と第二言語習得)を教えています。大学にとってどのような授業を開講するかは長期的な経営戦略にもかかわるので、新しい教員の専門性に沿った授業を開講して

くれることはあまり多くないようです。この直近の経験から、専門性を貫くことに加えて、(ティーチングを円滑に行うためには)ジェネラリストとしての知識も博士課程の間に磨いておく必要があったと感じました。

2) 博士論文は博士課程の一部でしかない。

英国の多くの大学で博士課程の授与の条件は、80,000-100,000 字の博士論文を執筆することです。ページ数にすると、約 300 ページです(文系の場合)。3、4 年間かけて一つのプロジェクトに取り組むわけですが、自らの博士課程を振り返ってみると、博士の論文執筆に費やすことができた時間は全体の 40%程度だったように思います。博士課程後に、アカデミアの道に進む場合には、博士論文の提出に加えて、リサーチとティーチングの経験が(自分の博士論文以外で)必要になるとよく耳にします。私も、博士課程の間は複数のティーチングとリサーチのポストを兼任しながら、修士の学生の論文指導、共同研究、研究費用の獲得、本の執筆、チャプターの執筆、国内外の学会発表、自らの学位を支援するための奨学金の獲得、ジャーナル紙の査読、研究グループの運営、学会の運営をこなしてきました。今でもよく覚えていますが、毎日夜の 8 時を過ぎるとようやく、自らの博士の論文に向き合う時間を確保することができました。その時間は至福のときでした。周りの博士課程に所属する同僚たちも多かれ少なかれ同じような経験を経ているように思います。同僚の中

には博士課程の学費や生活費を賄うために、カフェやアパレルでアルバイトをしながら博士課程をしている同僚もいました。博士論文は課程全体のごく一部でしかないと思身をもってつくづく感じました。

3) 大学で求められる英語力を身につけるのは茨の道である。

専門分野の研究をこなすためには学術的英語力の中でも特にライティング力が必要不可欠です。ただ、自分の研究を売る(研究力をアピールする)ためには洗練されたスピーキング力(概念をわかりやすく説明する力)も必要となることを博士課程が終わりに近づくにつれて(就職活動の面接を経るにつれて)痛感しました。これまで8年間英国を拠点として研究をしてきましたが、今でも自分の英語力に自信を持ってないことが日常茶飯事です。特に授業を担当したり、学生の論文指導をする際は、もう少し綺麗な英語の表現を使って、難しい概念をわかりやすく説明することができたら、理想の自分の姿を夢に思い描きながら、日々教育に携わっています。また、英語を母語にもつ(または英語が堪能な)同僚が授業中に使う言い回し、語彙力、ことわざ、そして、発話のスピードや情報量の違いに圧倒されることもしばしばです。現在の舞台は英国ですが、高等教育にどのような形で自分が(日本人として)貢献していくことができるのか、日々思考を巡らせています。

最後に、坂口財団の皆さまをはじめ、私の研究を応援してくださってきた方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。今まで、研究活動を継続することができたのも、私のことを支援してくださってきた方々のおかげです。坂口財

団の皆様には、この2年間大変お世話になりました。恩返しをすることができるように、今後も研究・教育活動に精一杯従事していきたいです。今まで、私のことを温かく応援してくださってきた方々に心から感謝しつつ、この総括レポートを締め括らせて頂きたいと思います。今まで、どうも有り難うございました。

以上